

青山 本日のパネルディスカッションのコーディネーターをさせていただきます、豊根村地域づくり推進室長の青山幸一です。どうぞよろしくお願いたします。今日は、全国過疎問題シンポジウムの二日目ということで、昨日からご参加の方も、大勢お越しいただいております。昨日の議論では、大学との連携やコンサルタント、地域おこし協力隊など、外部からのサポートがきっかけとなって、内なる価値、地域の良さを発見しながら、つながりを強化し、地域の戦略を作っているということだったと思っています。

本日は、そのあたりのテーマを掘り下げながら、豊根村ならではの地域の課題も織り交ぜ、具体的な議論をしていきたい、地域側からの視点での議論をしていきたいと思っています。

よく過疎問題ということが論じられますが、往々にして都市側から見た過疎論というか、都市から考えた田舎はこうではないか、こんなふうになるといいんじゃないか、という議論が比較的多いようです。うまくいかどうかわかりませんが、今回は、過疎側、地域側から都市に向けて発信していこうと思っています。

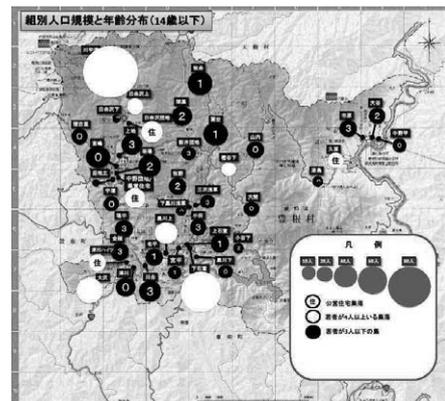
先程、生桑振興会の藤井さんが「都市をもっと巻き込んでいくべきだ。田舎がなくなると都市も消滅するのではないか。」とおっしゃられました。まさしくそうだなと感じました。そういった議論を、ぜひ、今日はしていきたいと思っています。

私自身は、今の仕事をする前に、愛知県庁で過疎対策の担当を長くしてまいりまして、最初は、山村のことをあまり知らなかったわけですが、山村に通ううちに、だんだんと魅力にはまってまいりまして、特に、人が生きていくために必要なものが、山にはたくさんあるな、ということ強く感じました。私は、かれこれ20年くらい過疎という問題に携わってきていますが、先程の豊根村の花祭りが消滅した話のように、だんだんと活力が減ってきているように感じます。もう少し以前は元気があったように思いますが、ここにきて、限界集落という問題が言われるように、いよいよ限界が見えてきた部分があると思います。

そのような観点を含めて、全国各地からお越しいただいたパネリスト4名の方とともに議論を深めていきたいと思っています。また、折角ですので地域側からということで、会場の方も巻き込んで議論を進めていきたいと思っていますので、ぜひ会場の皆さんにもご協力いただけるようによろしくお願いいたします。

まず、はじめに、よくいわれる高齢社会ですが、豊根村での様子を集落ごと高齢者の分布として作ってみました。グレー、黒ありますが、数字が入っている、例えば7とか、4とか入っていますが、これは高齢化率が70%、40%とご理解ください。丸の大きさは集落の人数です。一番大きな円は100人程度です。一番小さな円は10人以下の円になっております。豊根村に40の集落がありますが、このような形で分布しておりまして、比較的、国道に沿って高齢化率の低い白丸が多い。国道から離れるとともに、高齢化率の高い集落が多くなっていく。また、「住」と書いてあるものは、豊根村の村営住宅を整備してある集落です。豊根村の中には、民間経営のアパートがありませんので、村営住宅を点らせて整備している状況です。

もう一つ、私として危機感をもっております問題が少子化です。次にその分布をまとめてみました。黒は、14歳以下の若い方が3人以下のところ。こう見ると14歳以下の人口が、0や1という集落が非常に多くなってきていると感じます。要は、これからの担い手をどういうふうに確保していくかが、これからの地域の課題だと思います。



豊根村自体は、ある意味、高齢少子化の日本でのトップランナーであります。トップランナーの地域が、これからの未来をどのように描いていくのか、うまく描くことができれば、日本全体のモデルになっていけるのではないかと、と思っています。

今日は時間の関係もありますので、パネリストの方々のご自己紹介をいただいたうえで議論を進めたいところですが、このような形で少し議論を進めながら自己紹介を兼ねてご意見をうかがってまいりたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

パネルディスカッションにあたって資料を用意させていただいております。今回のテーマ、「地域を守る、

地域を育てる」、それから全体会のテーマ「外からのサポートと内なる価値」。お手元のほうに資料を二つほど入れさせていただいています。このあたりから皆様とともに議論を深めていきたいと思います。

まず初めに、「地域を守る」について。国全体の定住人口が伸びていかない中で、当然、過疎地域で人口を伸ばしていくのは至難の業です。高齢化、それから若者が非常に少ない、どうしたらいいのだろうかと考えていく中で、何のために過疎地域を守っていくのか、人がいなくなったらどうするのか、というようなことを、いつも思います。先程、「田舎がなくなれば都市もなくなる。」という発言を頂きましたが、確かにそういう面もあるけれど、今、実際私が暮らして思うのは、田舎がなくなっても都市はあるのではないかとやっぱり思う部分があります。どのように地域側がこれからを考えていけばいいのか。そのあたりを豊根村の富山という地区、非常に小さい集落に住みながらNPOの活動や地域住民としての活動をしている森本さんから自己紹介を兼ねて、現状、また取組をご紹介しますと思います。よろしく願いいたします。

森本 皆さん、こんにちは。ようこそ、富山、豊根村へ来ていただきましてありがとうございます。これは僕が事務所にしている清山荘という場所ですけれど、ここで何をしているかということ、先程青山さんからお話があったように、少子高齢化ということで学校存続が危ぶまれる中、都市部の子供たちを受け入れて地元の小学校へ通わせるという山村留学事業を行っています。そこで、私は指導員として働いております。それとともに、田舎と都市部を結ぶ、交流イベントのプロデュースもやっております。写真ですけども、これは親子を対象にしたもので、7組募集したのですけれど14組の応募があって大変好評で、僕、右端でうちの子供を抱っこしています。二人の子供がいまして、実は自分の子供がいるのですが、こういう子供たちを対象にして自然とか、ここに住んでいる人とか、そういう魅力を発信したいな、そういう思いで、イベントプロデュースをしております。

これは先程、青山さんからの言葉にあったように、茶臼山というところで芝桜のイベントをしております、ここで、村から買っていただいたロバを連れて、PRしているという写真になります。

ここで、僕が意識しているのは、自然もそうなのです

けれど、人と出会え、人間関係を楽しみ、人とのつながりをお土産に帰ってもらいたいな、そういう思いでイベントプロデュースをしております。

これが、先程も演目にあった花祭りの系統を汲んでいる、富山の御神楽祭りというものです。僕、2011年にこの豊根村富山に来たのですけれども、この660年、もう少し続くのかな、そういう伝統がある御神楽祭りを、舞うことができました。これも村の人の受け入れが整っていて、とても気さくな方ばかりなので舞うことができたと思っております。

これが学校から一週間前くらいに撮った写真です。写真を見て僕が思うのは、この風景、そしてこの人たちを、どうにか守っていけないのか、とそういうことを常々考えており、都市部に住む人たちも一緒になってこの風景、そして、この人たちを守っていけたらと思っています。

青山 ありがとうございます。

森本さんは、富山に住んでまだ2年ほどですので、まだまだ都市の感覚を持ってみえると思うのですけれど、都市側から見ると守っていききたい山の魅力っていうものが見える。そうした部分を、地域に住む私たちは、普段暮らしているとなかなか感じられない部分があるのですけれども、やはり自分たちがどのような地域にしていくのかを、しっかり地元で考えていかなければならないということでしょう、と先程、生桑振興会の藤井さんの話を聴きながら思っていました。人口が減少していく中の方法論として、「地域のことは自分たちで守ろう」という活動をご紹介します。

藤井 写真の紹介からさせていただきたいと思います。これが、現在の店舗でございます。もともと店舗がこの半分しかなく、商品の品数も大変少なかったのですけれど、現在では6,000品目を超える商品がございます。唯一、衣料品店がこの店舗から400メートルくらいのところにありますが、そこの経営者も、もう高齢化していると。ただ、もう少し経営をするということで、その経営をやめたら、ふれあい市さんの方でお願いしたいということをおられます。

こちらの、この部分がコミュニティコーナーということになっております。安芸高田の産物ですね、これもコーナーを作って展示販売をさせていただいております。これが新しくリニューアルした店舗ということでござい

ます。

このアンケート、「いかがでございましょうか。」ということで、来店していただいたお客さんにアンケートに記入していただいております。なかなか辛辣なご意見を書いていただくものもありますし、そのことで、店長が少ししょげることもあるのですが、そうして希望というか要望があることが大事なのだよ、という考え方に、プラス思考でいこうじゃないかということで、このアンケートを実施しております。

これが、コミュニティコーナーです。これは、現在のコミュニティコーナー。新しく机を入れ替えまして、こういう形でやっております。たまさか、広島県知事が来店しまして、一日店長としてPRをしていただきました。また、生桑振興会の取組を教えてほしいということで、その時に、記念撮影も一緒にさせていただいたということでございます。これが祝込みの行事。外を見ましたら、こういう雪の中ですけれど、笛や太鼓が響いてきて、嬉しかったですねえ。この段階で、1年でなんとか新設ができたのですよ。ガソリンスタンド、許認可をはじめとして手続きを始めますと、だいたい3年くらいかかるらしいのですけれど、1年でなんとかやりきることができました。そして、冬場の灯油が必要な時期というの、一週間程度休んだくらいで、後はなんとか継続して灯油の配達等もすることができたということでございます。外を見ましたら、けっこう若い人がこのメンバーに加わってですね、来てくれておりましたので、後姿を見てくれたのかなという感じがした一瞬でございます。

これが花田植。昔はこの中にいろんな衣装を、装束をつけた牛が入って田を耕して、その後、サンバイさんが音頭をとりながら、この方たち、早乙女さんというのですけれども、実際に苗を植えて、後ろでは「はやし田」を奏でながら、ひとつの祭りの行事としてやっているものでございます。これは近くに北広島町というところがあるのでございますけれど、北広島町の花田植がユネスコ登録を確かされました。その隣なのですけど、私どものところは、もう少し努力が足らんかなという状況でございます。

先程、話ができなかった分があるのですが、実はこの取組にあたってですね、私は、40年間地元におらなかったということは申し上げたと思うのですが、おらなくて、良かったなという気持ちがございます。といいますのも、豊根村ではそういうことはないかもわかりませんが、私のところはものすごく封

建的な面が残っておりまして、物事を一つ決めるのにも段取りがあるのですね。この方にまず話をして、次はこの方に話をしてということで、一つの事業、あるいは活動を決めるのに、相当根回しをしないと次へ進めない、というのがあります。

このガソリンスタンド、それから店舗の新設については、もう待ったなしだったのです、秋には閉店しますと。事実上、2か月ほどずらして閉店していただいたのですが、秋が終わるともう灯油がいる季節になります。灯油がないと、たぶん冬は、かなりの人が難儀したろうと思います。そういうことで私、地元の風習というものをあまり知らなかったものですから、もう織田信長ですね、はい、「行け、行け！」ということでドーッと走りました。

走る中で気が付いたのが、地元の人が、ガソリンスタンドがなくなるということを知らない、という方があまりにも多かったということです。それで、役員がそれぞれ分担して、6つの地区に入って懇談会というものをやりました。懇談会の目的は、情報の提供です。プラス面もマイナス面もすべて提供しました。そして、どうするか。この地区からガソリンスタンド、店舗がなくなる。どうしましょうか、ということ住民の方に投げかけて、それを集約して、結果として90%を超える方がガソリンスタンド、店舗がなくなるとは、明日の生活ができないという回答、というか意向がつかめたということです。

そこで、情報の共有というのも大切なだけけれど、なんでそうした情報が伝わっていないのだろうか、ということなのですね。後の新聞等で、私、いろいろ書かせてもらったり、各種会合で話をさせていただくのですけれども、ひとつ皆さん「あきらめて」くださいということを申し上げました。「あきらめる」ということは、物



事を投げ出すということではなく、「明らかに極める。」今、私たちの現状がどういう状況なのか、ということ、一人一人が見極めていただきたい。自分の立ち位置をしっかりと掴んでほしいと。そうすれば「ではどうするか」という発想というか議論に行くでしょう、ということですね。情報の共有を含めて「あきらめる」、明らかに自分の立ち位置を見極めてください、井の中の蛙ではいけませんよ、ということを上申してですね、6ヶ月くらいは織田信長の感覚で、あるいはヒトラーみたいな感覚で引っ張っていったという実態がありました。

青山 ありがとうございます。

現実を見る、現実を見極めるためには、藤井さんが、外から何年かぶりに帰られたということも一つの要素なのかなと感じさせてもらいました。そういう意味では、次に発言を頂きたいと思っております杉崎さんは、新潟県の長岡市栃尾で、外部から地域に入って、地域の中から地域をみつめる、「明らかに見極める」作業をされているのだと思います。活動の紹介をお願いします。

杉崎 新潟県の山の暮らし再生機構の杉崎です。私は先程、青山さんから話がありましたが、大学生の時に、豊根村でインターンとして、いろいろ活動をさせていただきました。そういった経験を踏まえて、そのような仕事をしていきたいということで、4年前から、新潟県の長岡市、ちょうど8年前、中越地震という新潟県の中山間部であった地震ですけれども、その地域で、地域復興支援という仕事をしています。

どういう仕事かといいますと、地域復興支援というのは、今からちょうど5年前にできた制度なので、新潟県の中山間地、山間地で、主に、中越地震があった時に、その過疎部で地震が起きたことによって、今ま



で過疎が徐々に進んでいたところで、その地震をきっかけに、若い人がいなくなったりであるとか、人がいなくなることによって、地域のコミュニティの維持が大変になったという、いろんな問題が急に顕在化されてきたと。そういったところで、外からの人間が入ることによって、これから、その地域をどうしていこうか、ああしていこうかっていうのを、一緒になって考えながら、これからの地域の戦略を立てるといような仕事をしています。

細かい仕事内容、取組は、皆さんにお配りさせてもらった「栃尾サテライト新聞」というのがありますが、これに普段の活動が載っていますので、後程ご覧いただければと思います。

私が活動している地域ですが、新潟県の長岡市というところの山古志村というのは、地震後に全国的に取り上げられましたが、その隣の栃尾というところで、でかい「ジャンボ油揚げ」ですけれども、こういうものを作ったりしているところとか、あとは、山間部は、主に棚田があって、お米がメインの産業で成り立っているような地域で活動をしています。

これが栃尾の風景です。具体的に、活動内容の写真ですけれども、こちらが、地域の中で一緒になって、もう一回地域を見つめながら、これからどうしていこうかと一緒に考える作業というのをやったりとか。今まで、例えば、地域の人たちが、お米はここがうまいのだ、なんとかしていきたいのだ、という話があった中で、お米を売っていくにはどうしたらいいのか、というのを考え、その中で、一つの交流という手段を使いながら、みんなでお米を若い人たちに伝えていこうというような形で、これは一緒に田植えをしている交流会の様子ですけれども、そういったことをやったりしています。そういったことを通しながら、今まで地元の人たち、一緒に話をする、「米がうまいんだ。」とか、「売ってくれ。」とかいう話をするのですが、そういうことだけではなく、例えば、お米を売っていくためにはどうしたらいいのか、実際に手を動かしながら、みんなで考えたり、というような活動をしています。

そういった活動を踏まえて、主に、みんなで最終的に、今まで地震が起きる前までは、ここは自然と過疎になるのだからいいのだ、みたいな雰囲気があったのですけれども、地震をきっかけに、自分たちの抱えている課題が結構見えてきて、そういったものがきっかけとなって、このままではまずいのだということで、いろいろな活動を通しながら、これからの地域を、みんなで考えなが

ら取り組んでいこう、というような活動をしています。

以上になります。

青山 この写真はどのようなことでしょうか。

杉崎 こちらは、具体的な活動内容の写真です。みんなで考えるきっかけとして、例えば豊根村でやっているような、大学生を呼んでくる中で、その大学生と一緒に村のことについて考えたり、外からの視点でいろんな地域の魅力を出してもらったり。一つのきっかけとして、こういう活動が広がることによって、いろんな交流が生まれたりとかいう活動が起きています。

これは田植えを一緒にやっている様子ですが、外からの人が来て、一緒になって、その地域の良さとかを伝えながら交流が始まる。そして、こういう活動することによって、その地域は、今まではその集落の人たちでこういうのは成り立っていたのですが、例えば、大学生が来ることによって、一緒に田植えができたりとか、例えば、一回来た大学生というのも、先程の豊根村の「とよねサポーターズ」があったのですが、それと同じような形で、一回来た子たちが、毎回毎回、やはり、その生活の変化であったりとか、学生も社会人になったりして来られないのですが、これは、来られない子たちが旗を寄付して、自分たちは写真で参加しようというような活動です。いろんな人たちが関わる中で、外からの人が直接ここに来ることだけではなく、いろんな形で地域の支え合いのような活動が生まれています。

これも、東京でやった交流会の写真ですが、外から大学生が来たのをきっかけに、地元の人たちが今度は東京に出向いて、住んでいる人と、あとその地域から出て行った、例えば東京に在住している子供ですが、そういった子供を呼びながら、ひとつの地域の輪が広がっている。こういったつながりを作っていくことによって、その地域が抱えている過疎の問題、ただ移住者を増やすとかそういった部分だけではなく、広く、これからの地域の担い手を捉えられるといいかなという形で活動しています。

これは、東京に行ってお米を、出身者の若い30代の男性ですが、この人は40代で、この子は30代ですが、昔、小学生の時、この子が学校から帰ってくると、黒い車を洗っているお兄さんだったと。でも、

大人になって改めてこういうところで再会すると、あのお兄さんは、こういう思いがあって、地域でこうやってお米を作って売っているのだと伝わったりするような風景の写真になります。

それと、もう一回自分たちでその地域を考える中で、これは、自分たちでサンタクロースの格好をして集落の中を練り歩いているのです。自分たちの地域を見つめようということ、この集落では集落の魅力ある景観づくりをしていました。そして、その景観を使った集落カレンダーを作ったのですが、こういった活動をする中で、カレンダーを作って終わるだけではなく、きちんとその活動を、地域全体に広げていくためにはどうしたらいいかということで、作ったカレンダーをクリスマスの際に、みんなで村中を練り歩いて配った写真です。

こういった活動を通すことによって、みんなで、これからどうしようか、というのを、今考えるようなきっかけづくりをやっているという感じになります。こういった形で、地域に住んでいる人だけではなく、外から来る人であるとかを含めて、地域をどうしていくかを、一緒になって考えられるといいかなということで活動しています。

青山 ありがとうございます。

サンタクロースというのがありましたが、豊根でも、最近水戸黄門が出ていまして、地域の力がいろんな形で動きを出していくことが、次に繋がるのでは、と感じたところです。豊根村も、栃尾と同じような活動をしてきたと思いますが、なかなか、明確な過疎脱却というところまでにはつながっていないのが現状です。そういった点を、長年豊根村に携わっていただいた佐久間さん、お願いいたします。

佐久間 大阪市立大の佐久間と申します。はじめまして。どうもご無沙汰しております。

先程からご紹介いただいているように、私は、平成9年に豊根村にインターンとしてお邪魔してからのご縁になります。当時は、体験宿泊（豊根村山村生活体験宿泊）の指導員と、移住された方へのインタビューをして回りました。インターンとして参加した時、あるいは後輩が参加している時に、OBとしてお邪魔していく中で、たくさんご馳走になり、おいしいお酒を頂き、楽しい時間を過ごさせていただきました。改めてお礼申し上げます。



こういう「ご縁」を、先程青山さんから「新しい縁」へということで、ご紹介がありましたが、何とか続けていきたい、とサポーターズという団体を結成しました。当初は、団体の目的を具体的に貢献活動にするのか、緩やかに「ご縁」をつなぐことにとどめるのか、議論がありました。まずは、敷居を低くして、多くの仲間とつながっていくことが大事ではないか、と緩やかに「ご縁」をつないでいくことを目的としています。私自身は、大阪に来て子どももできて、最近は足しげく通うほどの頻度ではなくなっておりますけれど、去年はインターン生の後輩、青木さんがコーディネートしてくれて、地域の方と、楽しい場を持つことができ、緩やかな「ご縁」が続いております。

とはいいながら、たくさんお世話になった思いを何かお返ししたいと、サポーターズを立ち上げた当初は、具体的に活動もしておりました。例えば、地域の小学生とまちあるきをして、地域資源の発掘を試みたり、昔の人々が歩いていた旧道を一緒に歩いてみたりしました。また先程、県立大の方のお話がありましたが、私たちも、地域の方の暮らしぶりや歴史を聞き書きする活動をしました。体験宿泊は、今お休みされていますが、20年近く続いた歴史があり、OB・OGは延べ3,600人近くになります。何とかこういう「ご縁」もつなげていきたいという試みもしています。

近年は私自身がたまたま大学に籍を置いていることもあり、早稲田大学の宮口先生、千葉大学の木下先生、今日も会場に来ていらっしゃる鳥取大の筒井先生とインターンに関する本をまとめました。また、筒井先生や法政大の岡村先生も交えて、インターンをはじめとした、都市と農山村の関係をよりよくしていくための研究会を通じて、活動を続けています。

いくつか研究の事例をご紹介したいと思います。イ

ンターン生のOBが、事業に参加した後どれだけ地域に再訪しているのかを地域ごとにまとめたものです。インターンの会という、任意団体の事業に参加した学生を中心に聞きました。実は豊根村、あまり再訪する学生は多くないということも分かっています。インターン生側の課題もあるでしょうが、受け入れ側の課題もあるかもしれないと今は感じております。例えば、宿泊など受け入れの拠点ですとか、他の事業との連携、担当者のつながり、インターン生と時間を共有する長さなどが、再訪の要素になりそうだ、というのが結論でした。

別の調査ですが、福島の川俣を事例にしたものです。川俣は、たくさん学生が再訪しています。どうしてだろうか、受け入れにあたる地域の方とインターン生にお話を聞いて、強みと弱みをうまく掛け合わされているということが分かってきました。それを整理したのがこの図です。この図で言いたかったのは、外部人材は万能ではないということです。ある時期がくれば通えなくなるでしょうし、数人のインターン生が数週間地域に入るだけで地域が変わるっていうことは、私自身の体験や反省も含めて、当然難しいことだと感じています。でも、可能性がないかというところでもなくて、そのインターン生の弱みと地域の強みが掛け合わさったり、地域の弱みとインターン生の強みが掛け合わさったり、何か補いあうような関係が、うまく構築できれば「新しい縁」の可能性が広がっていくのではと感じております。

青山 ありがとうございます。

そうですね、全部が、今日の報告とか、今回のテーマでもある外部のサポートがすべてを解決する手段ではなくて、あくまで「きっかけづくり」なのだと思いますし、入ってみているいろんな良さ悪さ、メリットデメリットもあるのかなと思います。

今日は、過疎シンポジウムが開催されるということで、愛知県立大学から活動写真のパネル展示を頂きました。会場にも学生の市野さんが参加していただいています。市野さん、一年生から四年生になるまでの四年間、ずっと豊根に通っていただいた経験から、今の話は、どのように感じられていますでしょうか。

市野 豊根に来て活動している学生側から、今までの取組についてちょっと述べたいことがあるのですが。

大学の中で生活していくと、地域の方と話す機会というのがすごく少ないのですよね、今の段階では。豊

根村に学生が来ることによって、活動は村の方との交流を中心に行なわれているので、学生が、ただただしくもコミュニケーションをとろうとして、コミュニケーションをとる機会になっているのです。学生に対して、村の方も、若い人が来てくれてうれしいとか、よく来たね、また来てねという形で、すごく暖かく迎え入れてくれるので、学生にとっては、大学以外にも、村が自分の居場所にもなっていると感ずることができるといことを、いろいろな活動参加者の話の中から聞かせてもらっています。

特に、就職活動をしていくと、コミュニケーション能力が重要といわれることが多いんですけど、大学の中で、ただぼんやりと過ごしていくと、話す機会というのがすごく少なく、コミュニケーション能力が鍛えられないまま、いざ就職活動をしようとする、じゃあ、自分どうしよう、何をしてきたんだろうと振り返って、自分について語れないということが多くあるのですけれど、村で活動することによって、私は、人と話すことを学んできたのだとか、相手の立場に立って物事を考えるということを実際に経験として持っている、すごく自分に自信が持てたりだとかする、村に学生が入って活動するというのが、学生にとっても成長できる場になっているのではないかなと、私は四年間の活動で考えるようになりました。

青山 ありがとうございます。学生さんにとって地域に入ることは非常にスキルアップとか、人生の中で良い経験になっていくのだなあと。田舎にある昔ながらの良さとか、活躍できる場があるということが大切なのかなというふうに思います。

佐久間 あの、少ししゃべらせていただきたいのですが、会場の青山重夫さんのお話をお聞きしたく存じます。私がコーディネーターでもないのに僭越ですが、会場と議論しながら村発の考え方を探っていきたいという趣旨ですので、ご容赦ください。

今、県立大の方からお話がありましたし、私自身も、学生を送り出す側としての立場としても、インターン事業が学生のためになるということは、本当に感じる場所です。一方で、地域の方にとってはどうなのだろうか、ということ、私自身考えてきました。青山重夫さんは、早い段階で村の地域づくりインターンのご担当をされていらっしやいました。いろいろ悩みながら、受け入れ

をされてきたのではないかな、というふうに思います。一度、どんなことを悩まれていたのかとか、先程、水戸黄門をされているというお話もうかがいましたので、最近の活動とあわせて、外の人とのつきあい方とか、受け入れ方で、感じておられることをお話いただくと、会場全体で課題の共有ができるのではと思います。僭越ですけれども、いかがでしょうか。

青山重夫 それでは、水戸黄門ということで紹介されましたので、なぜ水戸黄門かというところからちょっと簡単にお話したいと思います。

役場の前の大入川をすこし下ったところに「大入の郷」という施設がございます。これは下黒川区民全体です、ハコモノを作る際に、住民の有志で村から少ないお金をいただいて運営していく施設にしようという目的をもって作った施設でございます。メンバーとして30名から40名くらいの会員がいる施設でございます。その中の有志で、毎年ですけれども20代から60代半ばくらいの方で、水戸黄門の劇を、敬老会の際にやったりして、地域活力のために皆さん協力してやっております。

地域づくりインターンの関係でございますけれども、やはり担当が、まだ未熟な頃でしたので、試行錯誤でやったわけなんですけれども、やはり、民泊という前提が、学生を受け入れる際にあったということで、受け入れ先を見つけることにあたる苦労は大変でした。受け入れ先をお願いするには、前年度受け入れていただいたお宅を先に訪問して、なんとか受け入れてもらえないか、という問題点がありました。今考えますと、やはり2週間の滞在の中で、村の課題に対して、何ができるのかという疑問もありましたし、私は、インターン生の受け入れというものは、やはり、私もUターン組でございますけれども、田舎の生活にどっぷり浸かってしまっていますと、この生活が持っている、こういう山間部が持っている資源ですね、そういったものが当たり前のような感覚でいる中を、よそから目線で、地域に新しい風を吹かせていただきたいということで、期待を含めて実施しておりました。

今考えますと、高齢者のお宅訪問が多かったかなと思っています。学生さんたちが、いつでも入れるような、いつ来ても、気楽に住めて、そこに地域の方が集まれるような、拠点施設というようなものがあればですね、サポーターズも来やすいし、住民の方も、民泊されますと、

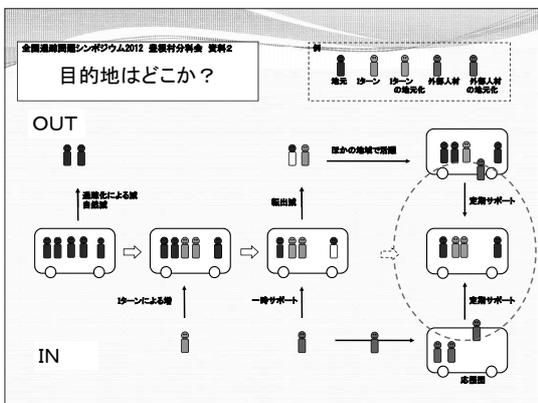
そこにはなかなか集まりづらいですけども、ひとつそういう目的を持った、拠点となるような施設の整備があれば良かったかな、と感じている次第です。

青山 ありがとうございます。

いつも、私も思っているのですけれども、学生にとっては、どうもメリットがありそうだ。だけど、なかなか、地域にとっては、メリットが見出せないと思っています。

定住人口が減っていく中で、人がいなくなっていく中で、やはり外の方は必要なのだけれど、どういうふうに使っていったらいいのか、地域側にとって。学生にとっては、必要な経験にもなるし、いったん地域の外へ離れてみると、魅力的に見える地域ではあるものの、最初に言いましたが、だんだんと維持できなくなっている。どういうふう維持したらいいのか、というモデルをひとつ考えてみました。

資料をご覧ください。過疎化でだんだん人口が減ってきました。Iターンによる増加を考えてきましたが、これも限界がありました。また、一次的なサポートとして、インターンであったり、地域おこし協力隊のような形で入ってきていただくようなこともやってきましたが、これも、なかなか人口増という解決策になっていかない。過疎地域は、将来どんな地域になってしまうのか。少し前に「あいのり」という番組がありまして、ラブワゴンという車が走っていく中で、いろんなところで、いろんな女性、男性が乗り合って、いろんな物語をつくっていく。それと重ねあわせてですね、地域が、一つのラブワゴンと仮定して、いろんな人が混ざりあっていく中で、これからどんな展開ができるのかなということをちょっと想像してみました。



一つは、先程、外にはメリットがありそうだ、内はどうもわかりにくい。外部人材を、どのようにサポート機能として引き込んでいくのか。

それからもう一つは、やはり地元としては、出て行った出身者の方に戻ってきてもらうのが一番いいなあということがいつも話でも出てきます。同感するところでもあります。ほかの地域で活躍している出身者をどうしたら、また、こっちに戻ってきて一緒にやろうよと、巻き込めるのか、そんなことを考えながら、今回思いましたのは、本来、豊根村というエリアが、このラブワゴンであるとしたら、もう少し、この豊根村という概念を広げられないだろうか。他の地域に今は住む方も含めて、一つの集落であるとしたらどうだろうかということを考えてみました。



この写真は、豊根村の猪古里（いのしごり）地区で、2年前に行ったある交流事業の参加者の集合写真です。これを見て、はたと、これはいいなあ、この写真のメンバーがもし猪古里の集落の人だとしたら、とても持続可能性がある集落なのではないか。

しかし、残念ながら現実には、集落に現在11軒ほど家がありますが、地元にお住まいの方はこの青い丸の方々です。では、この写真に写っている、それ以外の方はどういう方か。黄色い方が、豊橋技術科学大学の方です。学生が入ってきて、お盆に出身者、猪古里の出身者の方を集めようというイベントを企画してもらったのですが、この黄色い丸の人たちが仕掛けました。そうしたら、この赤い丸の人たちが集まってくれました。赤い丸の人は、出身者の方々です。集まるきっかけをつくったのは、出身者の中でもこの緑の丸の人でして、今は集落の外で暮らしていますが、猪古里の集落に何かあれば来ています。まあ半分くらい住んでいる方もいらっしゃる。行事があれば手伝っている方々で、この方々がパイプ役となって、こういう会が作られました。

豊根村のほかの地域でも、集落の共同作業である草刈りには、村外へ出て行った方々がその時には戻ってきて、一緒になってやっているという例は、たくさんあ

ります。そんなことが、これからの集落のあり方として考えられるのではないのでしょうか。

ただ、まだ、猪古里の写真は、ただただ、一日のイベントです。これはまだ、非日常の世界です。それを日常というか普段の生活の中で、こういう外部の方の関わりを作っていくというのは、まだ非常に難しいと感じています。この集合写真の顔ぶれが集落だったらどんなにいいか。つないでいく方法を考えていきたいと思いません。

藤井さんどうでしょうか。先程、外からの若い方を店長にするとか、若い方がずいぶん参加していただいているという話がありましたが。若い方の参加というのは、どうなのでしょう。

藤井 若い者の活用といいますか、若い人たちに、自分たち中高年の起こした動きを見てほしい、知ってほしいということで、実は、生桑地区には4団体の神楽団があります。先程、神楽の話をしさせていただきましたが、一団体をだいたい30人から40人で構成しております。平均年齢は30歳代の若い者が中心になっております。神楽団が、今まで一堂に会してお酒を飲んだことがないということがありました。これは、地域外の力を活用というか、まずは足元を固めようということで、花見をさせていただきました。歴史始まって以来、はじめて4団体の神楽団が集まって花見をしたと。今後、継続していこうということで盛り上がり、その中で振興会も参加させていただいて。その火付け役は、振興会なのですが。それで振興会の活動を、今後は、あんたら若い者が担っていってくれよと。新しいスタンドも、店舗もできた。守ってゆくのは、若い者でお願いするぞと、そういうことを話をして、若い人たちも頑張ります、という雰囲気を持ってくれました。外の体制を固めるのもそうですけれど、私の地域は、まず住民の皆さん一人一人の意識をですね、自分たちで、これから守っていくのだという方向に持って行く、固めるというのが現状でございまして、そういう活動しております。

青山 その30代の方は、地元の方。外から来ている方というのは。

藤井 実は、神楽団の中には隣の町、隣の隣の町から来ている方もおられます。中には子供神楽団の小学校

の児童、あるいは幼稚園の園児が練習に通って祭りに来ると。そして、保護者もついてくると、親戚もついてくると、というかたちで外部の応援も相当数あります。

青山 ありがとうございます。

そういう意味では、富山の御神楽祭りもそういうような、同じような形になっているのでしょうか。

森本 はい、そうです。

青山 いきなりいらっしゃって、担い手になれるものなのでしょうか。

森本 これは聞いた話なのですが、本当に人が少ないということなので、「頼むから森本君、舞ってくれよ。」そう言われて、僕は舞ったというところが本音ですね。

青山 そういう意味では、人が少なくなってきたこと自体が、外部が入れる余地が生まれた。

森本 そうです。僕は入って、変な話「輝ける」っていうか、僕が躍動できる場所ができたというのは、すごく、うれしいなと思っていますところですね。それは若い学生が来た時、それを排除するのではなくて、「よく来てくれたね、じゃこれをやってくれよ。」といった土壌ができればすごく良いなと思っていますね。

青山 先程の議論の論点としては、「外はよさそうだよ、でも内としては、なかなかうまい使い方が描けないね。」という中で、杉崎さんの地域ではどんな感じ



で動いていますでしょうか。

杉崎 私の地域でも、大学生が来て、インターンという事でやったのですが、やはり地元の方としては、受け入れるのが大変だとか、やはり、どこかでそういう大変な部分が出てきてしまうのですけれども、それを乗り越えたところにあるのが、先程写真にあった、例えば、学生が来ることによって、地域に関心がなかった若い、若いというか40代、50代といった方たちが、地元に対して目を向けるようなことが起きる。この写真の右側の人は、50代ですけれども、けっこう若い世代だと、私たちの地域では呼ばれているのですけれども、こういった方たちが、外の人たちが来ることによって活動しやすくなったりとか、今まで、なんかしたいなという思いがあったのですけれども、そういう思いを出せるような感じになってきて、地元の人たちもうまく活用して、若い人を引っ張りだしながら、今までやってきたことというのを、若い人たちにも関わってもらいながらやってきているようなところがあって。そういったところにも、うまく受け入れ地域側として活用すると、メリットというのが少し出てくるのではないかと思います。

青山 ありがとうございます。

最初の頃に、藤井さんが「やはり自分の地域は自分たちで守ろう。自分たちの将来像をちゃんと描かなければならない。」と言うことがあって、そういうものがしっかり描けないと、ただ外部の方を入れても漠然としてしまって、例えば外部人材に頼り切ってしまったとか、そういう問題がおきてくるというように感じます。

地元がどういふふうにより外部人材を使うのか。豊根村にも確かに反省すべき点が多く、とにかく誰か入っても



られれば、なんとかなるのじゃないかという期待感が強くあると思うのですけれども、それだけではなかなか地域がやりたいことにはつながっていかない。

佐久間さんは、いろんな地域を他にも見られてきたと思いますが、他の地域ではもっとこんなふうにやっているよ、というのはありますか。

佐久間 他の地域、そうですね、先程藤井さんの例からもありましたけれども、例えば、地域づくりの新たな取組をする際にどうしても、このおじいさんに理解してもらいたい、しかもこのおじいさんは地域では重要な人であるという時に、地域に住まわれている方が出掛けていって、そのおじいさんと対面しても、たぶん「若いもんが何を言うてるんや。」という関係を超えることはできないことが多いと思うのです。しかし、隣に、地域の外の若い学生を、その場に同席させて、「そのアイデアいいですね。」とか「こういうのもあるじゃないですか。」ということを見ると、そのおじいさんは若い人に対して、「お前、何を言うてるんや。これはできない、これはできない、これはできない、これはできない、これはできない…」と、若者に説得するかたちで、ご自身の中で、できない理由を確認されると思うのです。そうすると、意外とこうしてみたらやれることがあるのではないかと、というような形でおじいさん自身の気づきにつながったりすることがあります。例えば、そのように地域の主要な人のところに外の人を関係付けてみるのが一つあります。このように、地域で事業を広げていきたいときに、地域の人同士の関係ではこれまでの関係からうまくいかないときに、若い人なり、外の人を連れていくことで、新しい関係を広げていくときに使っていただけるとありがたいと思います。

先程、声を掛けていただいたから地域に行けるということもありましたが、外側で頑張っているだけではなかなかことが進まないと、正直感じるころです。「こういうのあるからちょっと来てよ。」とか、「こういう仕掛けでやりたいから協力してくれないか。」と、地域の方からどんどん外の人間を使っていたらいい、使ってもらえるようにしていただければありがたいと、感じております。

青山 そうなのですよ。

地元の「気づき」にとって外部の方は非常に必要だ

し、ありがたい存在であると思います。先程の集合写真で考えていたのは、これだけの少人数しか地元がいなくなっていく中で、少しでも集落の機能を、出身の方が補完というか手伝ってもらえないかなと。そんな仕組みづくりをできないかなということを思います。そうしていかないと地元にとっても、どうしても外部人材を受け入れることが負担になったり、来る人の面倒を見てやってもそれ一回きりで終わりということが、経験として多々あるわけですし。単なる「気づき」だけではなくて、次へつなげていくには、どんな工夫をしていったらつながっていくものでしょうか。

藤井 観点が違うかもしれませんが、いろんな議論をする場があると思います。生桑振興会では役員会とか、代議委員会とかけっこうあるのです。従前の役員会、代議委員会の意見発表がどうだったかはわかりませんが、やはり、意見を言い交すうえで、できないこと理由付けを議論をするというのは、やめたほうがいいのか、やめたほうがいいのか必要ないのじゃないか。できないことを延々と言うばかりで結論はなかなか出ないと。それより、ではどうするのだという議論を、この2年間を通じてすべきだったということを感じました。

そして、この地域社会で自分は二人いる、という見方、考え方をさせていただいたらどうかと思っております。例えば、自分が役場の窓口に住民票を取りにいった。カウンターの中にいるのも自分、お客も自分だと。そうした時に、自分はカウンターの中の自分に申請書を渡して、発行してもらおうかどうかどうだろうか、という見方なのですね。例えば自分が80歳になったときに、今は62歳だけ80歳になったときに、今回の敬老会は本当にこれで満足できるかどうかどうだろうか、ということ自分を敬老者の立場に立って考える、そして主催する立場になって考える、双方向から考えればけっこういい結論が出るのではないかなと。この二点をちょっと、これまでに感じました。

青山 なるほど、ありがとうございます。

自分が二人いるんだと。相手の身になってどれだけ考えられるか。先程のこの集合写真の、イベントだから来られるという方が正直多いと思うのですよね。それを、集落のことを自分のことだと思って行けるようなことが、出身者の中にもできれば。黄色が学生さんですが、

まだ、夏休みに遊びに来ているようなものだと思うのです。それをもう少し、親身になって考えてもらえるような形を増やしていけば、少しでも集落が身近になれば。恋愛に例えれば、遠距離恋愛であっても常に通ってくる、来たいなという思いが常にある。さっきのラブワゴンでいけば、普段は遠くに住んでいるのだけれども、すぐにでも会いたいな、行きたいなという気持ちが高まっていれば、出身者である赤丸の方は、イベントだけでなく、何かあればすぐ来れるのかな、と。

同じことが黄色の丸の学生さん達でも、そういう思いが高まってくれば応援団としていつでも駆けつけることができる。そういった関係性があれば、地域として外部人材が期待ができる人たちになるということでしょう。

ちょうど終了予定時間になってまいりました。

この今日の議論、最初に過疎側から議論したいということで私から言わせていただきました。1時間程度しか議論の時間がなかったわけですが、地域側からどんどん発信していけるような場をこれからも作っていきたく思いますし、地域側が思う外部のサポートのあり方を模索していきたいと思っております。これは最初に言いましたが、「日本の国では過疎地域は先進地域だ」という話です。悩むことは産みの苦しみと思っております。今日は明確な答えまでは出ていませんが、これからも苦しむ中で、地域の人とともに元気を出していけるようなことを探していきたいと、感じたところです。

時間が無い中ですが、会場から何かありましたら。

どうぞ真ん中の方。

会場1 今、議論の中で、皆さんがたどなたもそういう発言をされてなかったことで、こういうことも考えたほうが良いのじゃないかな、ということをやっと提案したいと思うのですね。

先程、佐久間さんから「強みと弱み」という話があったと思うのですけれども、まず、なぜ学生がこういう地域に来るかというときの、その来る強みは学生の持っている強みだと思っておりますけれども、時間軸で考えれば、非常に時間にゆとりがあったり余裕があったり、そういうようなことがある意味で学生が地域に足を向ける一つのきっかけになるのだろうと。そうするといろいろな年代層によって、時間というのを比較的自由に、自分の時間を自由に活用できる年代層というのが、学生以外にもほかにあるのじゃないかなというふうに思うのですね。それは何かといったら、リタイアグループです。今、人

間が細胞学的に、健康でまったく病気等と縁がなく生きていけるというその年代ってというのが、だいたい70代くらいまで。となると、60代70代というこの20年間の時間で、そういった方たちを、いかに豊根にしろ、地域にしろ、吸引することができるか。そういったものをやはり魅力性とか、視野に…ここに来ればこういうメリットがありますよと、いうふうな話ですね。そういう政策もやはり今後考えていくのもひとつの手ではないかなと思うんですね。だから、確かに若者という部分にとらわれてしまうと当然、限界とか年代性とか、あるいは継続がどうも、リピーターとしても乏しいというのがありますけれども、その辺をよく考えれば、先程シンポジウムで発言なさった佐久間さんにしろ、杉崎さんにしろ、ある意味では豊根村で育ったというか、豊根村をきっかけとして他の地域で仕事をしていける、こういったものを捉えていくと、広い意味で今、目の前の問題も重要なものだけれども、もう少し長い時間軸で考えていくってことと、それからもうひとつ時間というものを少し考えに入れると、そういったリタイア後の人生をより豊かに生きるか、そういうコンセプトでもっと考えられることがあるんじゃないかなと思います。以上です。

青山 ありがとうございます。確かにご指摘のとおりで、この集合写真の緑の方は、出身者で中心となって動いている方々ですが、確かに、多少家庭に余裕ができたり、時間ができた年配の方です。そういう方々が入りやすい地域、そういう方々を期待していくような地域を模索していく必要があると感じさせてもらいました。

ほかにはいかがでしょうか。

会場2 定年になりまして、定年までは中央区の築地で仕事をしておりました。その後、自分も多少、全国あちこちに小さな山があるものですから、それを管理しながら、自分のところは100年先に木を切ればいいという

ことで、今、日本の山全体が荒れてきておりますので、それを何とかしようと。そのためにいくつか候補地を挙げまして、たまたまこちら豊根村、私、今住んでいるのは富山なのですが、そこへ来まして。NPOのとみやま交流センターの方々とも知り合いましたし、地元の人とも知り合って、いろいろやっております。足かけ三年目になります。こちらに単身で来ております。私なんかも、富山なんかで一番必要なのは、いろんな数だとか、地域を元気にさせようとするために必要なもの。現実的に今、必要なものはコミュニティーセンター。これ決してきちっとした施設でなくていいと思うのですよ。空き家でも良いのです。ちょっと使えて、みんなが集まれるところ。それともうひとつ、外部から人を呼んでくるとき、コーディネートするときに一番必要なのはゲストハウスです。これをできれば役所関係のほうで、どこか適当なところを確保していただくとか、それか、安く使用させていただけるとか。そういう便宜をはかっていただく、すごくやりやすいと思います。いろんな提案も含めての話ですが。

青山 豊根村のこれからの取組に協力いただけるパートナーとなっただけなのではと期待させていただけます。

時間をオーバーしておりますので、これで終了させていただきたいと思います。全国からご参加いただいたみなさん、パネリストのみなさん、それから豊根村のみなさん、人口が増えない状況で、どのように地域側が考えていくのかは、少し考えを変えていかなきゃならないと思っています。いろんな模索をしながら、新しい過疎、それから過疎側から出す議論、提案というのをもっともっと増やしていきたいという思いを強くさせていただいた次第でございます。そうしたところを最後の締めくくりとさせていただいて、パネルディスカッションを終わりとさせていただきます。

どうもありがとうございました。